

屋上の狂人

菊池寛

青空文庫

人物

狂人

勝島義太郎

二十四歳

その弟

末次郎

十七歳の中学生

その父

義助

その母

およし

隣の人

藤作

下男

吉治

二十歳

巫女みこと称する女 五十歳位

時

明治三十年代

所

瀬戸内海の讃岐さぬきに属する島

舞台 この小さき島にては、屈指の財産家なる勝島の家
の裏庭。家の内部は結ゆいめぐらした竹垣さえに遮さぎられて
見えない。高い屋根ばかりが、初夏の濃緑な南国の空
を画かきぎっている。左手に海が光って見える。この家の長
男なる義太郎は、正面に見ゆる屋根の頂上そんきよに蹲すま踞よし
て海上を凝視している。家の内部から父の声がきこえ
る。

義助

(姿は見えないで) 義よしめ、また屋根へ上つとるんやな。こ

なにかんかん照つとるのに、暑気あつけするがなあ。

(縁側へ出て) 吉治きちじ！ 吉治はおらんのか。

吉治 (右手から姿を現す) へえなんぞ御用ですか。

義助 義よしたろう太郎を降してくれんか。こんなに暑い日に帽子も被らんで、暑気あつけがするがなあ。どこから屋根へ上るんやろ。この間なやいうた納屋のところは針金を張ったんやろな。

吉治 そらもう、ちゃんとええようにしてありますんや。

義助 (竹垣の折戸から舞台へ出て来ながら、屋根を見上げて)
あなに焼石のような瓦の上に座って、なんともないんやろか。

義太郎！ 早う降りて来い。そなな暑い所におつたら暑気して死んでしまふぞ。

吉治 若旦那！ 降りとまあせよ。そなた所におつたら身体のとくやがなあ。

義助 義やあ、早う降りて来んかい。何しとんやそなた所で。早う降りんかい、義やあ！

義太郎 (けろりとしたまま) 何や。

義助 何やでないわい。早う降りて来いよ。お日さんにかんかん照り付けられて、暑気するがなあ。さあ、すぐ降りて来い。降りて来んと下から竿でつつくぞう。

義太郎 (駄々をこねるように) 厭やあ、面白いことがありよるんやもの。金比羅こんぴらさんの天狗てんぐさんの正念坊しょうねんぼうさんが雲の中で踊つとる。緋ひの衣を着て天人様と一緒に踊りよる。わしに来い

来いいうんや。

義助 阿呆なことというない。お前にとりついでとる狐が誑だましよるんやがなあ。降りんかい。

義太郎 (狂人らしい欣びに溢れて) 面白うやりよるわい。わしも行きたいなあ。待つといで、わしも行くけになあ。

義助 そななことをいうとると、またいつかのように落ち崩くじるぞ。氣違いの上にまた片輪にまでなりやがって、親に迷惑ばつかしかけやがる。降りんかい阿呆め。

吉治 旦那さん、そんなに怒ったって、相手が若旦那やもの効くもんですか。それよりか、若旦那の好きなあぶらげをかうて来ましようか。あれを見せたらすぐ降りるけに。

義助 それより竿で突ついてやれ、かまやせんわい。

吉治 そななむごいことができるもんな。若旦那は何も知らんのをや。皆憑ついている者がさせておるんやけに。

義助 屋根のぐるりに忍び返しをつけたらどうやろうな、どうしでも上れんように。

吉治 どななことしても若旦那には効き目がありやしません。本ほ

伝んでんじ寺の大屋根へ足場なしに上るんやもの、こなな低い屋根やこしはお茶の子や。憑ついとる者が上らせるんやけに、どうしたつて効きやせん。

義助 そうやろうかな。あいつには往生するわい。気違いで家の中にじつとしたりするんならええけれど、高い所へばつかし上り

やがつて、まるで自分の気違いを広告しとるようなもんや。勝島の天狗てんぐ気違いというたら、高松へまで噂がきこえとるいうて末がいいよつて。

吉治 島の人は狐がとり憑ついとるいうけれど、俺は合点がてんがいかながなあ。狐が木登りするといふことはきいたことがないけになあ。

義助 俺もそう思うとんや。俺の心当りは別にあるんや。義の生れる時にな、俺はその時珍しい舶来もとごめじゆうの二元もとごめじゆう込銃こめじゆうでな、この島の猿を片つ端しから撃ち殺したんや。その猿が憑いとるんや。

吉治 そうやろうな。それでなけりや、あなに木登りのおたつしやなわけはないからな。足場があるまいが、どなた所

へでも上るんやけにな。梯子はしご乗りの上手さくな作さくでも、若旦那には
かなわんいいよりますわい。

義助 (苦笑して) 阿呆なことをいうない。屋根へばかり上つと
る息子を持った親になつてみい。およしでも俺でも始終あいつ
のことを苦にしとんや。(再び声を張り上げて) 義太郎! 早
う降りて来んかい。義太郎! 降りんかい。……屋根へ上つと
ると人の声はきこえんのや、まるで夢中になつとるんや。あい
つが上つて困るんで、家の木はみんな伐つてしまつたけど、
屋根ばかりはどうすることもできんわい。

吉治 私の小さい頃には、御門の前に高い公孫樹いちようがござんしたな
あ。

義助 うむ、あの木かい。あれは島中の目印になつた木やがな。

いつであつたか、あの木のでつぺんへ義太郎が上つてな、十四、五間もある上でぱかんと枝の上に腰かけているやないか。俺もおよしもあいつの命はないもんやと思つてあきらめていると、またするする降りて来てな、皆あきれてものがいえなかつたんや。

吉治 へへえ。まるで人間業わぎでござんせんな。

義助 だから俺あ猿が憑ついとると思うんや。(声をあげて) 義やあ、降りんかい。(ふと、気を変えて) 吉治! お前上つてくれんかい。

吉治 けど人が上ると、若旦那はきつうお腹を立てるけんな。

義助 ええわ、怒つてもええわい。上つて引つ張り降してこい。

吉治 へいへい。

(吉治、梯子はしごを持って来るために退場。その時、隣の人、

藤作がはいってくる)

藤作 旦那さん、今日は。

義助 やあ、ええ天気やな。昨日降した網はどうやったな、大小

かかったかな。

藤作 根つからかかりやしまへなんだわ、もうちつと季しゆんが過ぎと

るけにな。

義助 そうやろうな、もうちつと遅いわい。もう鱈さわらがとれ出すな。

藤作 昨日清吉せいきちの網に二、三本かかりましたわい。

義助 そうけい。

藤作 (義太郎を見て) また若旦那は屋根でござんすか。

義助 そうや、あいかかわらず上つとるわい。上げとうはないんやけど、座敷牢の中へ入れとくと水を離れた船のようにしているんでな。ついむごうなつて出してやるとすぐ屋根や。

藤作 けど若旦那のようなのは、傍はたの迷惑にならんけによござんすわな。

義助 あんまり迷惑にならんこともないでな。親兄弟の恥になるでな、こなに高い所に上つて、おらんでいるとなあ。

藤作 けど弟さんの末すえさんが町の学校でようできるんやけに、旦那もあきらめがつくというもんやな。

義助 すえじろう 末次郎が人並にできるんで、わしも辛抱しとんや。二人

とも氣違いであつたら生きとる甲斐がないがな。

藤作 実はな、旦那さん。よく効くみこ巫女さんが昨日から島へ来と

るんでな。若旦那も一ぺん御祈禱ごきとうしてもろうたら、どうやろう

と思うて来ましたんやがな。

義助 そうけ。けど御祈禱しても今までなんべん受けたかわから
んけどもな、ちよつとも効かんでな。

藤作 今度ござらつしやったのは金比羅こんぴらさんの巫女さんで、あら

たかなもんやつてな。神さまが乗りうつるんやていうから、山や

まぶし伏の祈禱とは違うてな、試してみたらどんなもんですやろ。

義助 そうやなあ。御礼はどのくらい要るもんやろ。

藤作 治らな要らんいうておりますでなあ。治ったら応分に出せ
いうとります。

義助 末次郎は、御祈祷やこし効くもんかいうとるけど、損にな
らんことやけに頼んでみてもええがなあ。

(この時、吉治、梯子を持って入ってくる。竹垣の内へ
はいる)

藤作 そんなら私は、金吉のところにいる巫女さんと呼んできま
すけにな。若旦那を降しといておくれやす。

義助 お苦勞様やなあ。そんならええように頼んまつせ。

(藤作を見送った後) さあ義よし！ おとなしゆう降りるん

だぜ。

吉治 （屋根へ上つてしまつて）さあ若旦那、私と一緒に降りましょう。こなたな所にいると晩には大熱が出るからな。

義太郎 （外道げどうが近寄るのを恐れる仏徒のように）嫌やあ。天狗様が皆わしにおいておいでをしとる。お前やこしの来る所じゃないぞ、なんと思ふとるんや。

吉治 阿呆なこといわんと、さあ降りませ。

義太郎 わしにちよつとでも触ると天狗さまに引き裂かれるぞ。

吉治 （義太郎に急に迫つて、その肩口を捕えながら下の方へ引下ろす。義太郎は捕えられてからはほとんどなんの抵抗もしない）さあ荒ばれると怪我をなさりまつせ。

義助 氣付けて降すんやぜ。

吉治　（義太郎を先に立てながら降りてくる。義太郎の右の足は負傷のため跛びっこになっている）巫女さんいうても、ちよつとも効かんやつもござんすからなあ。

義助　義はよう金比羅さんの神さんと話しするいうけになあ。金比羅さんの巫女さんいうたら、効くかも知れんと思うてな。

（声を張り上げて）およしや、ちよつと出て来いよ。

およし　（内部にて）なんぞ用け。

義助　巫女さんを頼んだんやがなあ、どうやろう。

およし　（折戸から出て来る）そらええかも知れん。どななこと
でひよいと治るかも知れんけにな。

義太郎　（不満な顔色にて）お父とう、どうしたから降すんや。今

ちようど俺を迎えに五色の雲が舞い下るところであつたんやのに。

義助 阿呆！ いかも五色の雲が来たいいよつて屋根から飛んだんやろう。それでその通り片輪になつとるんや。今日は金比羅さんの巫女さんが来て、お前に患いとるものを追い出してくれるんやけに、屋根へ上らんと待つてゐるんやぞ

(その時、藤作、巫女を案内して来る。巫女は五十ばかりなる陰険な顔色した妖女のごとき女)

藤作 旦那さん、これがさつきいうた巫女さんや。

義助 やあ今日は、ようおいで下されました。どうも困つたやつでござんしてな、あなた、まったく親兄弟の恥さらしでな。

巫女 （無造作に）なにあなた様、心配せんかって私が神さんの御威徳ですぐ治してあげますわ。（義太郎の方を向きながら）この御方でござんすか。

義助 左様でござんす。もう二十四になりますのにな、高い所へ上るほかは何一つようしませんのや。

巫女 いつからこんな御病気でござんしたかな。

義助 もう生れついてのことでござんしてな。小さい時から高い所へ上りたがって、四つ五つの頃には床の間へ上る、御仏壇へ上る、棚の上へ上る、七つ八つになると木登りを覚える、十五、六になると山のとつぺんへ上つて一日降りて来ませんのや。それで天狗様やか神様やかそんなもと話しているような独

り言を絶えずいうとりますのや。一体どうしたわけでござんし
ような。

巫女 やっぱり狐が憑いとるのに違いござんせん。どれ私が御祈
禱をして上げます。

(義太郎の方へ歩みよつて) よくおききなさい！ 私は当国の

こんびらだいごんげんさま

金比羅大権現様 のお使いの者じゃけに、私のいうことは皆神
さんのおつしやることじゃ。

義太郎 (不満な顔をして) 金比羅の神さんいうて、お前会うた
ことがあるけ？

巫女 (にらんで) 何を失礼なことをいうのじゃ、神様のお姿が
目に見えるもんか。

義太郎　（得意そうに）俺は何遍も会うとるわい。金比羅さんは白い着物を着て金の冠を被つとるおじいさんや。俺といちばん仲のええ人や。

巫女　（上手に出られたのでやや狼狽しながら、義助の方を見て）これは狐憑きもひどい狐憑きじゃ。どれ私が神に伺つてみる。

（巫女呪文を唱え奇怪の身振りをする。義太郎はその間、吉治に肩口を捕えられながら、けろりとして相関せざるものごとし。巫女は狂乱のごとく狂い回りたる後、昏倒する。ふたたび立ち上った彼女は、きよろきよろとして周囲を見回す）

巫女　（以前とはまったく違った声音で）我は当国象頭山しょうずさんに鎮

座する金比羅大権現なるぞ。

皆 (義太郎を除いて皆腰を屈めて) へへっ。

巫女 (莊嚴に) この家の長男には鷹の城山の狐が憑いている。

木の枝に吊しておいて青松葉で燻^{くす}べてやれ。わしの申すこと違^{たが}うにおいては神罰立ち所に至るぞ。(巫女ふたたび昏倒する)

皆 へへっ。

巫女 (再び立ち上りながら空とぼけたように) なんぞ神さまがおっしやりましたか。

義助 どうもあらたかなことでござんした。

巫女 神様のおっしやったことは、早速なさらんとかえつてお罰が当りますけに、念のために申しておきますぞ。

義助 (やや当惑して) 吉治! それなら青松葉を切つて来んな。
な。

およし なんぼ神さんのおつしやることじゃいうて、そななむご
いことができるもんかいな。

巫女 燻くすべられて苦しむのは憑いとる狐や。本人はなんの苦痛も
ござんせん。さあ早く用意なさい。(義太郎の方を向いて)

神様のお声をきいたか。苦しまぬ前に立ち去るがええぞ。

義太郎 金比羅さんの声はあなな声ではないわい。お前のような
女子おなごを、神さんが相手にするもんけ。

巫女 (自尊心を傷つけられて) 今に苦しめてやるから待つてお
れ。土狐の分際で神様に悪口を申しおるにくいやつじゃ。

(吉治、青松葉を一抱え持つて来る。およし、おろおろしている)

巫女 神さんの仰せは大切に思わぬと罰が当たりますぞ。

(義助、吉治を相手に不承不承に松葉に火をつけ、厭がる義太郎をその煙の近くへ^{らっ}拉して行く)

義太郎 お父^とう何するんや、厭やあ、厭やあ。

巫女 それをその方の声じやと思うと^{くす}燻べにくい、皆狐の声じやと思わないかん。そのお方を苦しめている狐を、苦しめると思^うてやらないきません。

およし なんぼなんでもむごいことやな。

(義助、吉治と協力して顔を煙の中へ突き入れる。その

時、母屋の方で末次郎の声がきこえる)

末次郎 (母屋の内部から) お父さん、おたあさん、帰つて来ましたぜ。

義助 (ちよつと狼狽して、義太郎を放してやる) 末が帰つて来た。日曜でないのにどうしたんやろ。

(末次郎、折戸から顔を出す。中学の制服を着た色の浅黒い凜々しい少年。異状な有様にすぐ気がつく)

末次郎 どうしたんです、お父さん。

義助 (きまりわるそうに) ええ。

末次郎 どうしたんです、松葉なんか燻^{くす}べて。

義太郎 (苦しそうに咳をしていたが、弟を見ると救い主を得た

ように）末か、お父や吉がよつてたかつて俺を松葉で燻くすべるんや。

末次郎 （ちよつと顔色を変えて）お父さん！ またこんなばかなことをするんですか。私があればいいといたじやござんせんか。

義助 そやけどもな、あらたかな巫女さんに神さんが乗り移つてな。

末次郎 何をばかなことを。兄さんが理屈がいえんかつてそななばかなことをして。

（巫女を尻目にかけてながら燃えている松葉を蹴り散らす）
巫女 お待ちなさい。その火は神様の仰せで点ついとる火ですぞ。

末次郎 （冷笑しながら踏み消してしまふ）……。

義助 （やや語気を変えて）末次郎！ 私はな、ちつとも学問がないもんやけにな、学校でようできるお前のいうことはなんでもきいとるけんどな、なんぼなんでも、かりにも神さんの仰せで点^つけとる火やもの、足蹴にせんかつてええやないか。

末次郎 松葉で燻^{くす}べて何が治るもんですかい。狐を追い出すいうて、人がきいたら笑いますぜ。日本中の神さんが寄つて来たうて、風邪一つ治るものじゃありません。こんな詐欺師のような巫女が、金ばかり取ろうと思つて……。

義助 でもな、お医者さまでも治らんけんにな。

末次郎 お医者さんが治らんいうたら治りやせん。それに私かな

んべんもいうように、兄さんがこの病気で苦しんどるのなら、どななことをしても治してあげないかんけど、屋根へさえ上げといたら朝から晩まで喜びつづけに喜んどるんやもの。兄さんのように毎日喜んでいられる人が日本中に一人でもありますか。世界中にやってありやせん。それに今兄さんを治してあげて正気の人になったとしたらどんなもんやろ。二十四にもなつて何も知らんし、いろはのいの字も知らんし、ちつとも経験はなし、おまけに自分の片輪に気がつくし、日本中で恐らくいちばん不幸な人になりますぜ。それがお父さんの望みですか。なんでも正気にしたらええかと思つて、苦しむために正気になるくらいばかなことはありません。（巫女を尻目にかけて）藤作さん、

あなたが連れて来たのなら、一緒に帰って下さい。

巫女　（侮辱を非常に憤慨して）神のお告げをもつたいなく取り扱うものには神罰立ち所じや。（呪文を唱えて以前のような身振りをなし一度昏倒した後立ち上る）我は金比羅大権現なるぞ、ただいま病人の弟の申せしこと皆己が利欲の心よりなり。兄の病気の回復するときは、この家の財産が皆兄の物となる故なり。夢疑うことなかれ。

末次郎　（奮然として巫女を突き倒し）何をぬかすんや、ばかつ！（二、三度蹴る）

巫女　（立ち上りながら急に元の様子になつて）あいた！　何するんや、無茶なことするない。

末次郎 詐欺め、かたりめ！

藤作 (二人を隔てながら) まあ坊ちゃん、お待ちなさい。そう腹を立ていでも。

末次郎 (まだ興奮している) ばかなことぬかしやがって！ 貴様のようなかたりに兄弟の情がわかるか。

藤作 さあ、一度引きとることにしましょう。俺があんたを連れて来たのが悪かったんや。

義助 (金を藤作に渡しながら) 何分、まだ子供じゃけにどうぞ勘弁しておくれやす。あいつはどうも気が短うてな。

巫女 神さまが乗り移っている最中に私を足蹴にするような大それたやつは、今晚までの命も危ないぞ。

末次郎 何をぬかすんや。

およし (末次郎をささえながら) 黙っておいでよ。(巫女に)

どうもお気の毒しましたや。

巫女 (藤作と一緒に去りながら) 私を蹴った足から腐り始めるのや。(二人去る)

義助 (末次郎を見て) お前あんなことをして、罰が当ることはないか。

末次郎 あんなかたりの女子に神さんが乗り移るもんですか。無茶な嘘をぬかしやがる。

およし 私は初めから怪しいやつじゃ思うとつたんや、神さんやったらあんなむごいこというもんけ。

義助 (なんの主張もなしに) そら、そうやな。でもな末！ お前、兄さん一生お前の厄介やぜ。

末次郎 何が厄介なもんですか。僕は成功したら、鷹の城山のてっぺんへ高い高い塔を^{こしら}え、そこへ兄さんを入れてあげるつもりや

義助 それはそうと、義太郎はどこへ行ったやろ。

吉治 (屋根の上を指しながら) あそこへ行つとられます。

義助 (微笑して) あいかわらずやつとるのう。

(義太郎は前の騒動の間^いのつ^まの間にか屋根へ上つていたらしい。下の四人、義太郎を見て微笑を交う)

末次郎 普通の人やったら、^{くす}燻べられたらどなに怒るかも知れん

けど、兄さんは忘れとる、兄さん！

義太郎（狂人の心にも弟に対して特別の愛情があるごとく）末
やあ！ 金比羅さんにきいたら、あんな女子知らないうとつた
ぞ。

末次郎（微笑して）そうやろう、あんな巫女よりも兄さんの方
に、神さんが乗り移つとんや。（雲を放れて金色の夕日が屋根
へ一面に射しかかる）ええ夕日やな。

義太郎（金色の夕日の中に義太郎の顔はある輝きを持っている）
末、見いや、向うの雲の中に金色の御殿が見えるやろ。ほらち
よつと見い！ 奇麗やなあ。

末次郎（やや不狂人の悲哀を感じずるごとく）ああ見える。ええ

なあ。

義太郎 （歓喜の状態で）ほら！ 御殿の中から、俺の大好きな
笛の音がきこえて来るぜ！ ええ音色やなあ。

（父母は母屋の中にはいつてしまつて、狂せる兄は屋上
に、賢き弟は地上に、共に金色の夕日を見つめている）

——幕——

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短篇と戯曲」文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：大野 晋

2000年2月8日公開

2005年10月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

屋上の狂人

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>